

---

# 公安十三課の記録

アクケルテ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

公安十三課の記録

### 【Zコード】

Z7399Z

### 【作者名】

アクケルテ

### 【あらすじ】

機動六課のサポートとして作られた公安十三課。集まつた隊員は隊長含めて一癖ある者たちばかり。それでも仲間であるため協力して仕事をこなしていく。しかし事件は大きく変化を始める。それは隊員の誰もが関係する事で例外はなかった。それでも公安十三課は進んでいく。

## episode (前書き)

投稿は不定期になると想われます。  
他の方の参考にしながら早めに投稿します。  
それではよろしくお願ひします。

## episode

### －某研究所－

現在この場所は時空管理局の捜査が行われている。

捜査内容は非合法研究を立証する事である。

「酷い惨状だな。ここまで酷いのは見たことがない」

局員は周りを見渡す。カプセルに収められた人、獣人、竜種、怪蟲種が居た。

しかしその中でも他とは違うカプセルがある。中身は人。

見た目は中学生程度だろうか綺麗な碧い髪が非常に印象深い。

「ここに造られたのか？主任こっちに来てくれ」

局員が奥にいる白衣を羽織った女性を呼ぶ。

彼女は捜査協力に来た本局の第七技術部の主任である。

だが彼女自身この捜査にあまり興味がないため態度は気だるそうにしている。

「ここは人使いが荒いね」

「これなんだが」

カプセルを見た瞬間主任の目が生き返ったかのように輝いた。

「早くこれを運び出して！」

主任は近くにいた局員を集めてカプセルを運び出して行つた。

－七年後－

時空管理局地上本部六階。

ここはミッドチルダの公共安全を担つてゐる部署である。

陸士部隊とは別で管理局本局が統括する部署である。

公式名称『時空管理局本局ミッドチルダ公共安全課』。現在ここに元は十一課あり今日新たに十三課が誕生する。

真新しい物が部屋へと運ばれてくる。

「その荷物はそちらに。ああそれはここに」

作業員に指示を出しているのは十三課の隊員マリン・カータスだ。

階級一等空尉。魔力ランク空戦A A +。

赤い髪に本局の男性制服を着た“女性隊員”である。作業員は手際よく段ボールに書かれてある場所の近くに置いていく。しかし一つ場所が書かれていない荷物が出て作業員はマリンに聞くが彼女も置き場所に困っている。

「それは私のです」

入り口から荷物の持ち主が言つ。

名前はカルロス・ハルマン。

階級一等陸尉。魔力ランク陸戦A A A -。

身長は高く185cmあり武装隊員の白の上着、紺のズボンという服装である。

彼は自身の荷物整理に入る。

「おっはよー！て隊長いなの？」

次にきたのはこの課専属技術官フェルミ・フルートである。元は第四技術部の主任をしていた人で本局制服に白衣という技術官らしい服装である。

「フェルミそこは私の席よ

「いいじゃない。後期になつたら席替えするんだし」

フェルミは懶々マリンの荷物を退けて席を侵略していく。因みに席替え何てものは存在しない。

「……はあ」

マリンは仕方なくフェルミの予定の席へと荷物を移す。

三人の荷物が大体片付いた頃にまた一人隊員が来た。

「ういーす。何だよ俺の荷物そのまんまじやねえか  
来て早々に文句を言つたのはバン・コバヤシだ。

階級二等空尉。魔力ランク空戦A A A +。

オールバックの髪、庶民的な雰囲気が漂う元地上部隊員である。

「自分のものぐらい片付けないと彼女に振られてしまうよ

「なんだと！この唐変木の戦闘狂！」

カルロスとバンは言い合いを始めてしまった。

しかし誰も止める事はない。いつも通りの光景だからだ。

部屋の机は残り一つ。隊長、副隊長の分だ。

「隊長は挨拶周り？」

「ええ。しかし遅いですね」

時刻はいつの間にか昼前。あまりにも来るのが遅すぎた。マリンは考えられる可能性の一つにたどり着いた。

「「副隊長……」

マリンとフェルミは口を揃えて言つた。

それと同様にして残り二人がやつてきた。

「おはようみんな」

「眠いです」

前者が十三課副隊長レイン・フロックハート。

階級三等空佐。魔力ランク総合S-。

ウェーブかかつた碧い髪、美人と呼べる整つた顔に執務官服とフェルミと同じ白衣を纏つている。

後者は十三課副隊長メイス・ソーサー。

階級一等空尉。魔力ランク総合AAA+。

身長はカルロスとは対照的に低く160cmギリギリと低い。

「副隊長。寝起きですか？」

「はい。書類整理が全然終わらなくて」

メイスは席に着くなり寝る態勢に入った。

隣のバンが揺らして何とか意識はこちら側にある。

レインは座らずに挨拶を始める。

「この部隊を任せられたレイン・フロックハートです。我々は地上部隊とは別にミッドチルダの公共安全を目的とした部隊でみんなそれが別部隊出身もあり有事の際の連携も取りやすい筈です。各人よろしくお願ひします」

皆が拍手を送り全員の軽い自己紹介を済ませ整理を再開した。

半時間が経ち段ボールもなくなり部屋は綺麗になった。

「さて。初出勤はこんなものかしらね」

「隊長。私はここで寝泊まり出来るんですよ？」

「廊下の奥がそうなつているはずよ」

フェルミは廊下へと出て行つた。

「私は今から聖王教会に行きます。書類整理もないでしょうし定時に上がつてもらつていいわよ。マリンついて来て」

「分かりました」

二人は出て行きニッシュ・チルダ郊外の山奥に車を走らせる。マリンは教会に連絡を入れておく。

「隊長、騎士カンデロッソは不在です」

「構わないわ。今日はカリムに用があるから」

小一時間後目的地聖王教会へと着いた。

シスターに案内されカリムの元へ向かう。

教会内は飾り気のない質素な作りで綺麗に生けられた花瓶ぐらいしか目には入らない。

「騎士カリム。本局のレイン・フロックハート三佐、マリン・カータス一尉を案内しました」

「どうぞ入つてきて」

聖王教会騎士兼本局中将のカリム・グラシエは筆記作業を止めて入ってきた二人を招き入れる。

「久しぶりねカリム」

「ええ。カータス一尉も変わりないから?」「はい」

二人はソファーに腰掛けでカリムと少し談笑をする。それからすぐに本題へ入る。

「レリックの捜査範囲をもう少し広げて見ようと思つただけビビツカシラ?」

「んー」

カリムは少し考える。マリンは現在の範囲だと確保できるレリック

の数があまりにも限られることを補足する。

「ですけど十三課は公にミッドチルダの安全確保を目的として新設しました。確かに本来は機動六課の捜査補佐をするために作りましたが大きく前へ出ますと地上部隊に目を付けられます。それは避けてほしいのですよ」

カリムは少し語気を強めて話す。

「有能な人材が居なくなつてもいいのなら構いませんよ」

「分かりました。ミッドチルダ郊外にも範囲を広げてください」

「ありがとうございます。それじゃあ私達は帰るわ」

「騎士カンデロッソにも話は通しておきます」

「頼むわ」

「ようしくお願ひします」

二人は部屋を後にして行く。

「カリムも心配性ね。少しあは信じてあげればいいのに」

レインは少し残念そうな口調で言つた。

機動六課は新設のエリートばかりが集まつた部隊だ。リミッターを

かけられてはいるが隊長らの実績もあり万全のはず。

「そうですね。少し過保護のよつた気がします」

マリンも同意見らしい。

「ともかくバックアップの勤めはこなさないと」

二人は車に乗り込んで帰路へと着く。

## episode（後書き）

作者のアクケルテです。

初執筆なので至らない点多々あると思います。それでも長い目で見ていただければ幸いです。

それではepisode2でまた会いましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7399z/>

---

公安十三課の記録

2011年12月25日15時54分発行